

【論 説】

予見としての政治

—— ベルトラン・ド・ジュヴネルの未来予測論 ——

中 金 聡

自分の叡智だけで潔白と不正とを，得策と不利とを判別できるひとは
実際ごくわずかで，大部分のひとは他人の経験をつうじておそわる。

Tacitus, *Annales* [4. 33].

目 次

- 1 予測する動物 (*animal conjectans*)
- 2 政治学と未来予測
- 3 「フューチャリブル」——帰結の予測
- 4 予測の制度化とデモクラシー
- 5 「よりよき生」にむけて

1 予測する動物 (*animal conjectans*)

オルダス・ハクスリーの『すばらしい新世界』(*Brave New World*, 1932) といえは，ジョージ・オーウェルの『1984 年』(*Nineteen Eighty-Four*, 1948) と並び称される逆ユートピア小説の傑作である。どちらも未来の全体主義社会を描いたものだが，オーウェルのそれが「ニュー・スピーク」と呼ばれる過度に単純化された言語を支配原理とするのにたいして，ハクスリーの「新世界」は，体外発生を可能とするまでに発達した生殖テクノロジーとそれがもたらす科学的カースト制にもとづいている。

舞台は「フォード紀元」(ヘンリー・フォードが生誕した 1863 年から数えて) 632 年というから，西暦 25 世紀に相当する未来。そこではさまざまな先端医療テクノロジー——「ボズナップ法」および「ボカノフスキー法」なる受精卵クローニング技術，人工子宮内の胎児に施される優生学的操作，出産な

らぬ「出壺」（decant）後の嬰兒への条件づけ、あるいは睡眠教育や催幸福感薬物「ソーマ」の服用——を駆使して知性のヒエラルヒーが再生産され、隷従への愛が自由意志にたいして完全なる勝利をおさめている。つまり「すばらしい新世界」とは、プラトンのいう「血と土の神話」を科学が現実のものとした世界なのだ。ハクスリーはこの予言に相当の自信をもっていたようである⁽¹⁾。そのたぐいまれな想像力をもってしても体細胞クローニングやその商業化の可能性にまではおよばなかったが、現実の生殖革命は確実にこのペシミスティックな警世家の描いた体外発生ヴィジョンを追いかけてきた。小説家の想像力を上回っていたのは社会の変化のスピードであった。ハクスリー自身ものちに『すばらしい新世界再訪』（*Brave New World Revisited*, 1959）で、「フォード紀元7世紀にわたしが設定した全体的組織化の悪夢が、はるかかなたの遠い未来から生じ、すぐつぎの曲がり角でわれわれを待ちかまえている⁽²⁾」ことを深く憂慮するにいたる。

もちろん25世紀は現在からみても未来のことであるから、この予言の当否についての最終的判断は留保しなければならない。さしあたり確認すべきは、ユートピアあるいは逆ユートピア文芸の途切れることのない伝統が、未来（未だ来たらぬもの）の予見という困難な課題によって人類がいかに魅了されつづけてきたかを教えていること、またその難しさがわけても政治においてきわまることである。

政治にとって予見が困難かつ危険な課題であることは、トゥキュディデスの時代から知られていた。ペロポネソス戦争開戦前夜に、アルキダモスはラケダイモン人たちにむけて、「良きにつけ悪きにつけ、われわれはあらゆることの結果に責任があると考えられねばならないのだから、その分だけ落ち着いて成り行きの予見の任にあたるべきである」と主張し、アルキビアデスのシケリア遠征論にたいするニキアスの懐疑の根拠は、遠征の命運を決するのは人間の予見能力を超えた偶然（*tyche*）であるというものだった⁽³⁾。政策選択肢の将来結果を比較検討するごく短期的なものから、個々の政策決定が依拠するべきマスター・プランの策定や国家構造の変動のような中長期的なものにいたるま

で、政治という営みは予見することの責任から逃れられない。「よくいわれるように、統治するとは予見することなのだ。だからこそ政治は不測の事態に遭遇したとて言い訳することはできない。ところで不測の事態というものは存在する。そこに悲劇が存在する⁽⁴⁾」。トゥキュディデスから20数世紀を経た現代においても、メルロ＝ポンティが喝破したこの政治の真実はいささかも揺るがない。政治家になるために必要な資質はなにかと問われたウィンストン・チャーチルは、「それは明日、来週、来月、そして来年、なにがおこるかを予言する才能である」と意味深げな答えで煙に巻き、「そして後日その予言が当たらなかった理由を説明する才能をもつことだ」とオチをつけた。この大衆ジャーナリズム向けのよくできた冗談は、暗鬱な真理の一面をよくあらわしている。政治にとって第一義的に重要な未来は、現在の人間の意志とは無関係に実現してしまう望ましかったり望ましくなかったりする将来の状態もさることながら、むしろ望ましい未来をもたらす目的で現在のできごとの推移に介入した結果のことだからである。

社会諸科学にとっての未来の問題は、空前の計画ブームを迎えた1960年代フランスの未来学(futurology)において本格的に主題化された⁽⁵⁾。それが一躍脚光を浴びるきっかけになったのは、フランス電力公社副社長から経済企画庁長官になったP・マッセを中心として結成された「グループ1985」が、CGP(Comissariat Générale du Plan de l'Equipement et de la Productivité)による第五次経済計画(66-70年)のために1962年におこなった長期予測である⁽⁶⁾。だが未来学に活況をもたらした要因は、そのブームが一過性のものでおわる理由にもなった。マッセやC・グリュゾンのような財務官僚も加わったフランス政府主導の未来予測の特徴は、ケネーの経済表とレオンチェフの産業連関表を主として国有企業運営に活用していたことから明らかなように、60年代当時の脱イデオロギー化の風潮や科学およびテクノクラシーへのきわめて楽観的な信頼を背景に、計画化によって偶然(hazard)の作用を無化しようとする点にある。そして64年に「グループ1985」が発表した報告書(その予測によれば、平均4.7パーセントという高い国内総生産の年成長率が85年まで維持される

はずであった）にもとづいて実施された第五次計画は、そこに管理社会的抑圧、労働の不在、富の不平等配分をみる五月革命の「異議申し立て」という不測のできごとによって頓挫したのである⁽⁷⁾。

いくぶんセンセーショナルな響きをもち、荒唐無稽な夢物語を科学の装いで粉飾したかのような印象をあたえがちな「未来学」なる呼称は、ブームの渦中にあった当の未来学者たちのあいだでさえ忌避される傾向があり、その後「未来研究」(futures studies) なる術語の定着とともに、「プロスペクティブ研究センター」(Centre d'Etudes Prospective) を主催する哲学者 G・ベルジェの「プロスペクティヴィズム」(prospectivisme) や F・L・ボラックの「予測学」(prognostics) など多くの潮流が糾合されていった⁽⁸⁾。政治哲学者ベルトラン・ド・ジュヴネル (Edouard Bertrand de Jouvenel des Ursins, 1903-1987) の提唱する「フュチュリブル」(futuribles) もそのひとつである。ジュヴネルの『予測のアート』(*L'Art de la conjecture*, 1964) は、未来研究の第一次ブームが去ったのちもこの分野で現在まで読み継がれ、たんなる古典以上の価値と影響力を保ちつづける数少ない作品となり、かれが「未来にかんする反省を社会的義務と考える精神」[AC:9] を結集した学際集団「フュチュリブル」(FUTURIBLES) も、発足から 40 年以上を経た現在なおヨーロッパでもっとも活動的なシンク・タンクでありつづけている⁽⁹⁾。

未来研究が科学の名にあたいするかをめぐっては 21 世紀を迎えたいまなお論争が継続中であるが、未来研究史におけるジュヴネルの最大の貢献は、「フュチュリブル」なる造語をオーソライズし、その探求に哲学的な根拠をあたえることで論争そのものの地平を設定したことにもとめられる。このことばの意味は、『フュチュリブル——予測の研究 I』(*FUTURIBLES: Studies in Conjecture I*, 1963) の巻頭言でつぎのように説明されている。

われわれの標語は意図的に選ばれている。“futuribles”ということばは一六世紀スペインの思想家ルイス・モリーナから、かれが自由意志を強調したことに鑑み拝借したもので、未来 (future) および可能性 (possibility) という二つの観念の結合か

らできている。可能性を強調するのは、たんなるあらまほしき思考の拒絶だけを意味してのことでなく、未来がすでに「あたえられている」ことをも意味して、そしてもっぱらそのことを意味してのことである。われわれのグループは、将来のできごとがわれわれの選択にかかっているという考えかたを断固として採用する。未来はわれわれの決定と行動にかかっており、われわれの決定と行動は未来にかなするわれわれの意見にかかっている。まさしくそれだけに、われわれの意見は表明され、考量され、また吟味される必要がある⁽¹⁰⁾。

futuribles は来たるべき desirable/undesirable futures のことではない。それはまず現在のなかに予兆される可能的未来 (possible futures) であり、またわれわれの意志的努力がむけられるべき実行可能あるいは達成可能な未来 (feasible or achievable futures) を意味する⁽¹¹⁾。だが futuribles は現在の「われわれの選択」と深くかかわるがゆえにつねに複数形の alternative futures でありつづける。そして——これがジュ・ヴネルの主張のうちもっとも論争的な点であるが——futuribles は「われわれの意見」にかかわるかぎり「科学」の対象ではなく「アート」の問題である。

未来予測にはたず科学の役割評価が低いのは、『予測のアート』がとくにアメリカで多様な予測テクノロジー——ゲーム理論、シミュレーション法、システム理論、関連描出法、費用効果分析、デルファイ法、シナリオ・プランニングなど——が開発される前夜の作品であったことに帰せしめられ、またそのことが、アメリカ型未来予測の「客観的」方法論との対比で、しばしばフランス型未来予測が「主観的」あるいは「直観的」と称される傾向を促してきた⁽¹²⁾。しかし、合理的な根拠づけをもたない直観や印象がことこの分野にかなして一定の効力を有することは、たとえば景気動向の予測にあたって膨大なデータを処理する統計学的手法がいくら洗練されても、経験を積んだ経営者や投機筋の「カン」にはかなわないという周知の事実から明らかである⁽¹³⁾。『すばらしい新世界』をはじめ、テクノロジーの発展のはてに到来する逆ユートピアを描く 20 世紀の近未来小説の系譜をまえにすると、科学は万能の予測ツールではないということのほうがむしろわれわれの「直観」にかなうとさえいいたく

なる⁽¹⁴⁾。一般にフュチュリブル派とプロスペクティブ派は、予測という営みを過去の傾向の未来への「投影」(projection)あるいは「外挿」(extrapolation)と同一視せず、現在の選択によって未来を「創造」する契機を重視し、定量的変数に依拠した決定論的予測モデルにたいして定性的変数を用いる確率的予測モデルの有効性を主張すると考えられている⁽¹⁵⁾。

だが『予測のアート』においては、未来予測の方法論をめぐる科学と直観の対立そのものは副次的な問題にとどまる。ジュヴネルの理論的関心は予測の精度を向上させる方法ではなく、未来を予測するとはそもそものような営みかという問い、あるいは予測における人間精神の「モーレスの記述」[AC:161]にむけられている。人間とはいわば「予測する動物」(*animal conjectans*)なのだ。この試みには、いまなお妥当性を失っていないにもかかわらず十分に検討されてきたとはいえない二つの意義があると考えられる。ひとつは、それがすぐれて認識論的であるだけに、少数のエキスパートの手にゆだねられがちであった未来予測という課題を万人の関心事として論じる可能性を開くということである⁽¹⁶⁾。もうひとつは未来予測が有する政治学的な含意である。「わたしがこの主題を選んだのではなく、この主題のほうからわたしに迫ってきた」[AC:9]という一文は、『権力論』(*Du pouvoir*, 1945)や『主権論』(*De la souveraineté*, 1955)の著者にとって、未来予測がかれの積年の関心事であった政治権力やデモクラシーの問題と密接不可分であったことを告げている⁽¹⁷⁾。以下ではそのジュヴネルにしたがって、予測というトポスの政治哲学的な意味について考察しよう。

2 政治学と未来予測

未来予測への関心はジュヴネルの政治哲学者としてのキャリアの全体にわたって散見されるが、政治学に占める予測の体系的な位置づけが明確にされたのは、のちに『純粋政治理論』(*The Pure Theory of Politics*, 1963)としてまとめられた論考においてである。1961年にかれはつぎのように述べている。いま

政治学者が紀元前 415 年のアテナイにタイムスリップし、ペロポネソス戦争拡大の直接の原因となったシケリア遠征が決定される瞬間に立ち会ったとする。異邦人の政治学者はカテゴリーの異なる三つの問い、すなわち、①正当な決定権威者は誰か、②遠征は正しくまた利益をもたらすか、③遠征は実際に決定され舉行されるか、を発するだろう。ある特定時点における政治的な事物の配置（configuration）を問う①は、伝統的に政治制度論の問題に帰せられている。ある状況での行為選択にさいして最適解を勧告（recommendation）する②は、古来「徳」の名で知られる政治的思慮のことがらだとされてきた。そして③が予測（surmising）の問題である。「予測は人間的なことがらの遂行に不可欠である。誤った予測は破滅的なものとなりうる。……政治への関心の奥底に予測への関心があることはたしかなのだ。静態的なものと考えられる配置の記述や健全かつ徳ある態度の勧告がどれほど重要であろうと、ひとがなにをするか、そしてなにが起こるかの予見もやはり重要である」[PTP:6-7]。

「ひとがなにをするか、そしてなにが起こるかの予見」は、『権力論』および『主権論』において展開された政治哲学者ジュヴネルに固有のテーマの再提示であったと考えられる。それらの著作でジュヴネルが主張してきたのは、政治権力の正統性の問題を権力の「起源」への問い、すなわち権力の根拠や主体、あるいは政府の構成の問題と同一視することが、逆説的にも権力の無限成長を正当化し「権力の道徳的解放」をもたらしてきたのであり、それゆえ政治学の規範的アプローチということで取り組まれるべき問題は、いまや「だれが」決定すべきかではなく「なにを」決定すべきかであるということであった。この「なにを」決定すべきかは、それが未来におよぼす効果の予見、すなわち「帰結の予測」（surmising consequences）を必要とする。ただし社会の全体に深甚な影響をあたえる政治的決定の場合には、「帰結の予測」を決定権威者まかせにしておくわけにはいかない。『予測のアート』でジュヴネルは、アルキビアデス、ナポレオン、ヒトラーなど、それなりに有能だが徳性の点で難のある政治家の例とともに、ふたたび「誤った予測は破滅的なものとなりうる」[AC:165]と述べている。

未来予測はつねにヨーロッパ政治思想史上の中心的問題であったわけではない。このトポスがとりわけ近代にたどった悲劇的な帰趨は、ホッブズの著作のうちに確認することができる。かれはみずから英訳を試みたトゥキュディデス（*The History of the Grecian War written by Thucydides*, 1628）への序論で、原著者を「かつて著述したもっとも政治的な歴史家」と評し、「歴史の中心的かつ本来の仕事」は「過去になされたもろもろの行動の知識によって、人びとが現在にあって分別ある（prudently）ふるまいをなし、未来に向けて先見の明ある（providently）ふるまいをなすようかれらを教え導き、そしてそのようにふるまえるようにすること⁽¹⁸⁾」にあると述べた。未来のよい結果をもたらす先見（providence）の成否は、現在の行為選択にかかわるがゆえに「それ自身ひとつの卓越性あるいは徳」（アリストテレス）にはかならない慎慮（prudence）のことがらであり、慎慮はまた歴史が提供する経験的範例の知識にかかっている。人文主義的教養形成期にあった若きホッブズにとって、歴史はよりよい行為を可能ならしめる知恵の源泉であるがゆえに、すぐれて政治教育的な価値を有するものであった。だが後年の『リヴァイアサン』（*Leviathan*, 1651）になると、先見と慎慮へのかつての称賛は影をひそめていく。みずからの選択の結果の予見（foresight）は、慎慮ともどもいまやあまり信用のおけない能力とみなされるようになる。

未来は過去の諸行為の帰結を現在の諸行為に適用した心の假想にすぎないのであり、だからこれはもっとも経験豊富な者によってもっとも確実になされるが、それでも十分な確実性をもってではない。そして成果がわれわれの期待に応える場合は^{プルーデンス}慎慮と呼ばれるが、それ自体の本性からいってこれは仮定にすぎない。なぜなら、^{プロヴィデンス}来たらんとするものごとの予見は神慮であり、これはそれらのものごとを自分の意志によって引き起こすものだけに属するのだからである⁽¹⁹⁾。

もとよりホッブズにおいて歴史の意味が減じたわけではなかった。予見は感覚および記憶を素材とする「事実についての知識」（その記録が歴史である）に分類され、推論の結論からさらに別の結論へとすすむ「帰結についての知識」

とのあいだに認識論的区別が設けられただけである。しかも、後者の代表である科学が「(事実についてのではなく) 帰結についての真実を納得させることにしか役立たない⁽²⁰⁾」、すなわち普遍的であるかわりにつねに条件的な知識にとどまるのにたいし、個物にかんする個別的知識である予見は、経験の制約下にありながら個物にかかわるかぎりで「絶対的知識」とみなされてもいる⁽²¹⁾。にもかかわらず、かつて人間の知恵と分別の源泉であった歴史が「物語」となるにつれ、予見もまた学識の領域から放逐された^ん慎慮——「慎慮のしるしはすべて不確実である。なぜなら、成果を変更するかもしれないあらゆる事情を経験によって観察し、想起するのは不可能だからである⁽²²⁾」——の領域に封じ込められていく。この歴史から科学への哲学の準拠枠組みの転換にともない、ホッブズ政治哲学の基盤は永遠の現在である人間情念、すなわち自然状態を「万人ニ対スル万人ノ戦争」状況たらしめる「誇り」とそこからの脱出口を示唆する「暴力死の恐怖」の二大情念の分析へと移行するのである⁽²³⁾。

未来予測を政治学の手に取り戻そうとするジュヴネルは、いわばホッブズと反対の道をたどって、予測と慎慮ないし思慮 (deliberation) とのかつての関係を回復しようとするかにみえる⁽²⁴⁾。ホッブズ訳トゥキュディデスに寄せた序文のなかで、ジュヴネルはつぎのように述べている。「偉大な歴史的事件から引き出されるべき教訓が数行の金言に要約できるものなら、歴史研究は政治教育にとって無用なものとなる。そのときわれわれにはこの最終宣告だけでこと足りる。だが政治的思慮というものは、レシピのかたちでひとに伝えられるもののなかには存在しない。それは艱難辛苦のはてに習得されねばならないひとつの徳なのだ。……政治教育という領分では、ほかのどの領分とも同じく、ひとは自力で思考することによってしか何ごとも学ばないのである⁽²⁵⁾」。トゥキュディデスはシェイクスピアとならんでジュヴネルのアイドルでありつづけてきたが [PTP: xix]、そのかぎりでかれは若きホッブズと同じく、未来の予測を人間の諸力の完成過程の一環として位置づける古典的政治哲学の系譜のなかで思考しているといってよい。違うのは、この「政治教育」の課題がもはや為政者の徳の涵養にとどめられてはいない点である。1964年にジュネーヴで

開催された国際政治学会における講演「政治学と予見という課題」（“Science politique et taches de prévision,”1965）で、ジュヴネルはトゥキディデスに言及しつつ、政治学にとっての未来予測の重要性をあらためてつぎのように語っている。

歴史家のなかでももっとも偉大なこの歴史家は、われわれは自分の運命の張本人なのだとわれわれに警告している。

あらかじめよく考えずにおのれにとって重大な結果をもたらす決定をくだすことは、個人においては軽率である。しかしそのような軽率さは、公的決定——その結果はきわめて多くの人びとに影響をおよぼす——に参加する行政官や市民の場合は罪になる。それゆえ政治学者は、心に感じとられまた教えこまれるべきひとつの道徳的義務の存在を予見のなかにみとめなければならない。

だが、公的決定が予見をもって取り組まれるべきだと語ることはひとつの教訓である。それ相応の技量を発展させなければ、どうしてこの教訓にならうことがわれわれにできようか。予見が必要なことをさとした政治学者は、それゆえこの技量を自分と生徒とにおいて発展させ、自分が助言する政治家にこの技量を提供しなければならない。予見とは政治学者に要求される専門技術である。これがわたしのいいたい第一の点である〔DP:214〕。

ジュヴネルによれば、未来予測は政治社会に寄与する政治学の最重要機能であるが、同時にその習得および教育がもっとも困難な「最高のアート」（*ars artium*）でもある。この難しさの一端は未来を「知る」ということの意味に由来する。ホッブズが予見を「事実についての知識」に分類しつつその価値を疑問視したのは、将来に起こりうるできごとを既定事実のごとく完全に見とおす神慮がモデルになっていたからであり、そのかぎりで神ならぬ人間にとって未来はけっして「事実」にはなりえないからであった。だがそのことは、実はホッブズ自身が考える以上に正しい。ジュヴネルが問うているのは、あくまでも人間的な条件の枠内での予測であり、「予測する動物」としての人間である。

「可能な未来の知的構築とは、ことばの完全なる意味におけるひとつの芸術作品（un ouvrage d'art）である。そしてこれが本書で「予測」（*conjecture*）が

意味するものである」[AC:31]。『予測のアート』というタイトルの意味をこのように説明するとき⁽²⁶⁾、ジュヴネルが含意しているのは、未来予測が科学的認識および歴史叙述とさえカテゴリー的に別種の知のことだからだということである。科学の知と歴史の知がいずれも「事実」にかかわり、実証性あるいは経験的な検証可能性という条件を共有するのだとしたら、「可能性」にかかわる予測はむしろ想像力的活動としての性格を詩的創造とのあいだで共有する⁽²⁷⁾。これをジュヴネルは人間の行為とのかかわりでつぎのように説明している。

行為主体としての役割からみた人間にとって未来とは自由と力の領野であるが、認識する存在としての役割からみた人間にとっての未来は不確実性の領野である。未来が自由の領野であるというのは、いま存在しないものが未来に存在するであろうことをわたしが自由に構想するからである。未来が力の領野であるというのは、わたしが自分の構想を立証する（もちろんすべての構想を見境なしにというのはない！）だけの力をもっているからである。そして未来とは実際われわれの唯一の力の領野なのだ。なぜならわれわれは未来をめがけてはじめて行為できるのである [AC:15]。

『純粋政治理論』においても「未来は行為する人間の心に現前する」[PTP:8]という表現がみられるが、『予測のアート』の議論の特徴は、ラテン語の *facta* (*facere*, to do or to make の完了分詞) と *futura* (*sum*, to be の未来分詞) の比較から予測の存在論的根拠が引き出されている点にある。「未来の知識」(*connaissance de l'avenir*) なる表現はことばの矛盾であるように思われる。厳密に言えば *facta* だけが知られうる。われわれは過去についてだけ実証的な知識をもつことができる」[AC:15]。未来の科学としての「未来学」なるものをジュヴネルが幻想とみなすのは、それが未来を「われわれの知識にたいして受動的に提示されるモノ」であるかのように考えるからである。*futura* は *facta* と異なり、それを知ろうとする人間の営為の影響を受けない、いわば不動の現在から定点観測されうる静的な認識対象ではない。未来はつねに「行為する人間」の計画・企図・意図する目的の表象として存在する。このとき思考の役割

は、ホップズもいうように「意欲にとっての斥候やスパイのようなものであり、うろつきまわって意欲されたものごとくにいたる道を見つける⁽²⁸⁾」ことにある。

人間の事象の予測には自然現象の予測にはない特有の難しさがある。いま人間行為を仮に旅路のごときものと考えてみよう。旅人は世界の安定して持続的な構造を記した「現在の地図」を携え、そこに目標地点と予定到着時刻を書き込んで歩んでいる。この旅程を攪乱する未来の不測事（casuels）はもちろん生じるだろうが、それをあらかじめ完全に見越した旅程を作成することは不可能であるし、不自然ですらある。「現在の地図」のうえで起こりうる不測事にさえそなえておけば、たいていの企図は達成される。だが安定した世界を前提としたこの旅は、「社会の変形」（*déformation sociale*）によって頓挫する。社会を構成する人間の企図は「社会の一般形式の維持に都合のよいものでもあればそうでないものにもなりうる胚芽」[AC:54]を含むがゆえに、世界は人間の思惑をよそに緩慢に、またときにその意図をもった行為によって急激に変化する⁽²⁹⁾。未来予測にとってもっとも重要な課題は、まさしくこの人間の企図の結果として生じる「社会の変形」を予見することにある。畢竟その難しさは、未来を創造する主体である人間が、同時に知の主体としてみずからの行為の帰結を予知しようとすることに由来するのである。

人間は欲望し行為する存在である。人間は未来を欲求する——この領域のなかへ人間は自分の意志が行為の照準にするイメージを、願望を表象するイメージを投げこむ。だが人間は自分が現実へと変容させようとするイメージの受け皿以外のなにものかとしての未来を構想する。人間は知る存在、あるいは知ろうと努力する存在でもある。そして人間は未来を未来の現実あるいは *futura* の住まう領域と考え、それについての適切なイメージを形成しようと試みる [AC:55]。

ジュヴネルがあえて未来の「予測」（*conjecture*）といい、「予見」（*prévision*）や「予言」（*prédiction*）ということばを極力避けるのは、その対象が自然現象のように主体から独立した客観的なできごとではないことを強調するためである。そこから人間の事象の予測の第二の特徴が派生する。いわゆる「カッサン

ドラの予言」を考えてみよう。トロイア王プリアモスの娘カッサンドラは、木馬を城内に入れたらトロイアは陥落すると予言したが、トロイア人たちはそれを信じなかった。もしかれらがこの予言を信じていたなら、木馬は城外に放置されトロイアは安泰であっただろう。このエピソードは、予測が遂行的（パフォーマンス）な言明にほかならず、将来の事実を言明することにより、それにかんして何ごとかがなされるべきだと警告する行為であることをパラドクシカルに例証している。したがって人間的事象の予測にさいしては、「いま予見されている未来のできごとの実現を阻むわれわれの能力」[AC:71] が考慮されねばならない⁽³⁰⁾。予測された未来は、それを実現させまいとする行動を誘発するのである。

こうして未来予測は純粋に認知的な営みではありえず、本質的に実践的な活動となる。未来は過去から帰納的に構築されたその投影でないのと同じく、理論的に想定された関係にもとづいて演繹的に推論される原因の結果でもない。予測された未来が現在のわれわれの行為を規定し、それがさらに未来のできごとに影響する無限の循環過程のなかで、未来はさまざまな可能性のオプションに満ちたものとしてあらわれるのだからである。これを「未来の解釈学」と呼ぶことにしよう⁽³¹⁾。予測とは未来と現在とを創造的に発見するひとつのやりかたなのである。

3 「フュチュリブル」——帰結の予測

ところで予測がことさら問題視されるべき理由は、政治学者に固有の「道徳的義務」の観点だけから引き出されるわけではない。ジュ・ヴネルはそこに「種のニード」である予測への「人間としての自然的責任」[AC:18] があることを指摘している。安定した社会生活に必要な決定や行為の結果の予見可能性（*prévisibilité*）にかつて保証をあたえていたのは、人間相互の場合は習慣や慣習——ローマ人の「多数者の道徳」（*mos maiorum*）——であり、公的権威については行使される権力の限界を明確に規定し、あるいはルーティン化する法

制化や官職化であった。だがそれらは比較的变化に乏しい閉鎖的で静態的な社会を前提とした「古き良きやりかた」とみなされねばならない⁽³²⁾。この前提が失効した現代の動態的社会に生きることを余儀なくされているわれわれは、もはや過去に不確実性への処方をもとめることができない。

かつて徳と知恵のしるしであった過去への愛着は、いまや悪徳と愚挙のしるしである。近年のわれらが積極的価値となったのは変化である。このような知的転換は先例がない。われわれは実践の技芸すべてにおける尋常ならざる進歩をこの新しい態度に負っているが、その態度は世代から世代へ手渡されてきた手続きにもはや拘束されていない。……不変の社会システムによってわれわれに許され保証される予見可能性が小さくなればなるほど、われわれはますます予測に努力を注がねばならないのだ。ルーティンによって生活が支配された社会においてなら努力なしにもすまされようが、動的な社会においては懸命になって予測をおこなう機会がまちがいに増加する [AC:21-22]。

近代という時代は、社会そのものを未来の不確実性に抗する手段として構築しようとする努力によって際立っていた。この観点からみた近代社会の基本原理解は、「構造的確実性」(*certitudes structurelles*)と「契約による確証」(*assurances contractuelles*)である。「構造的確実性」は、自然の秩序のなかに見いだされる未来の事象生起の確実性（太陽が沈むのをみるとき、わたしはそれがふたたび昇ることを期待する）を人為的な社会制度のなかになアナログカルに読み込む（アメリカ大統領選挙は4年ごとの11月のある日に举行される）ものである。他方の「契約による確証」とは、約束の言明や名誉心が特定行為の将来における実現を保証するという意味での道徳的確実性をいう。しかしそれらはいまや「主観的」な確実性、すなわち「そのひとが既知のもの（予知されるもの）」としてあつかい問い質すことがなく、自分の計算の基礎におき、それとの関係で自分の行為の方針を規制する未来の特徴 [AC:56] 以上のものではなくなってしまった。ジュヴネルによれば、その結果は文明そのものの行く末にかかわる深刻な問題である。「われわれの近代文明は制度とコミットメントの神聖さ

を見捨てることによって、既知の未来を実現する手段まで一緒に見捨ててしまった。……われらが時代の大きい問題とは、事物がよりはやく変化することと来たるべき事物についてのよりよき知識の所有とをわれわれが同時に欲していることなのだ」[AC:61-62]。近代社会を特徴づけるこのような過去との断絶は、技術としての予測の必要性を高めるのみならず、予測の意味そのものに決定的な変化をもたらすはずである。なによりもそれは、必然的に確実な未来予測なるものが幻想にすぎないこと、つねに動揺し変化する社会を所与のものとするかぎり、未来は社会の集合的企図がめざす確実な定点としてはけっしてあらわれないことを暴露した。だがジュヴネルはペシミスティックな不可知論への退却をよしとはせず、人間の条件を所与のものとした未来予測の方法論を模索する。「われわれが予測をおこなうのは予言のやりかたを知っているからではない。……われわれは厚かましきからではなく、予測が近代社会の必要物であることをみとめているから予測するのである」[AC:345]。

そのさしあたりの出発点は、未来を「支配的」(dominant)な部分と「支配可能」(dominable)な部分とに分解することによってあたえられる。「支配的」な未来とは、たとえば「雨が降るかもしれない」のように人間の意志による影響をうけない物理的現象、あるいはそれに類したものをさす。ところで「人間の事象においては、未来はこのわたしにかんするかぎりしばしば支配的であるが、より力のある行為者、別のレベルにある行為者によっては支配可能である」[AC:71]。予測された景気後退は一企業家にとっては「支配的」未来であるが、通貨政策や財政政策、公共支出の調整のようなそれを阻止する手段を有する政府にとっては、同じ未来が「支配可能」なものとなりうる⁽³³⁾。

ここから予測の三つの類型が区分される⁽³⁴⁾。第一次的予測とは、「支配可能」な未来に対処する十分な力をもつ行為者によって仮に何ごともなされないとした場合に、現在の事態が将来どうなるかの予測である（このままでは交通量の増加とともに都市部の大気汚染は悪化の一途をたどるだろう）。第二次的予測とは、仮に行為者がかくかくしかじかの介入をおこなうとした場合に、現在の事態がそれぞれどのようになるかの予測である（政府がいま、(A) 自動車の

排気ガス濃度の規制，(B) 内燃式エンジンの禁止，あるいは (C) 都市部からの自動車の締め出しをそれぞれ決定すれば，大気汚染はおのおの a, b, c パーセント改善されるだろう）。第三次的予測とは，行為者が実際にどのような介入活動をおこない，その結果として事態は実際にどのようなになるかの予測である（自動車業界の反発を懸念する政府は結局なにもせず，そのため都市部の大気汚染は今後 x 年間に y パーセント悪化するだろう）[ACe:53-54]。

第一次的予測と第二次的予測は，おのおの「もし矯正活動がなければ」あるいは「もし特定の矯正活動がなされれば」という条件付きの未来の可能性にかんする予測であり，第三次的予測が未来の事実にかかわる「歴史的予測」であるのとは対比して「非歴史的予測」と称せられる。ジュヴネルの“futuribles”が関係するのは，「非歴史的予測」のなかでも，未来をその一部なりと「支配可能」なものにしうる行為者によって「なにがなされるべきか」の勧告を導く第二次的予測である。「こうした性格の予測が決定形成において大いに重要なことは明らかである。そのような予測の形成には，当該の現象について第一次的予測で要求されるよりはるかに多くの理解が必要になる。投入される要素の有効性は，既知あるいは想像上の因果関係を基礎としてはじめて評価される」[ACe:55]。ここでジュヴネルは，未来に実現する必然的かつ確実な「事実」を一般的歴史法則にしたがって予言することと，未来に起こりうる複数の可能性を具体的かつ個別の因果関係から予測することとを明確に区別している。未来についていやしくも「サイエンス」を称しうるのは，未来のできごとをア・プリオリな構図のなかに位置づけるパノラマ的な展望をもたない後者の「帰結の予測」だけなのである。他方の「歴史的予測」は，第一次および第二次的予測の検討に加え，決定権威者の気質や決定履行のタイミングなどの無数の外部要因を含むため，「著しくバクテリ」にならざるをえない。それゆえ「第三次的予測とそれ以外の予測類型とのいかなる混同も慎重に回避しなければならない」[ACe:55] とされる。

ジュヴネルによれば，未来にかんしては多様な可能性についての多様な「意見」しかありえない。「帰結の予測」である“futuribles”と同様であるが，そ

れはおのれが一個の「意見」にすぎないことを自覚しつつ、その言明によってよりよき未来を実現しようとするさまざまな（主観的ならざる）「個人的なもの」の投企の集成である。いいかえるなら、「いわゆる予言なるものは、つねにそれが真理だと仮定したうえでなにがなされるべきかを検討するための出発点であり、しかしつねにそれを実現させるためになにが将来なされるかにかんするさまざまな仮定のひとつの結果でもある⁽³⁵⁾」。ジュヴネルはこの多様な可能性にむかって開かれた未来を拒む七つの誤りをあげているが、いままでの議論からこれを大きく三つにカテゴライズすることができるだろう[AC:81-105]。

第一のカテゴリーは予測を過去の未来への「投影」とみなす予断であり、過去に観察された行動パターンや一定の傾向性が将来も持続すると考える「傾向延長」（一般に外挿法）、過去に観察された変化の環境や状況との類似が将来においても同様の变化をもたらすとみなす「アナロジー」（復興したブルボン絶対王政にイングランドのスチュアート王朝と同じ運命が待ちうけていると考えたフランスの自由主義者たち）、ある国民のたどった過去の軌跡は別の国民がこれから経験する未来の徴表となると想定する「鉄道軌道」（先進国をモデルにして途上国の経済発展や国民所得水準の向上を予測する国連）である。第二のカテゴリーは科学的原則の適用にともなう誤謬であり、未来のできごとを結果としてもたらす原因の特定が予測者の主観的選好に左右される「因果性」の危険、予測者の有する初期バイアス（メタ・ポリティクス）が予測のフレームワークを拘束する「ア・プリオリズム」の危険、また社会をさまざまな要素相互の有機的連関から構成された一全体として構想しつつ、その進化あるいは変動の動因特定がしばしば恣意的になる「システム」の危険がそれぞれ指摘される。そして第三のカテゴリーは、国家の規模の拡大はかならず国制の変化をもたらすと考えたモンテスキューとルソーの「形態」の予断である。

このいずれについても、ジュヴネルは未来を一義的に確定可能なものとみなす決定論的な先入見の根づよさを指摘しているが、未来予測にさいして科学のはたす役割への期待が飛躍的に高まった現代では、とくに第二のカテゴリーへの批判が重要であろう。『予測のアート』で取り上げられているのは、経済予

測におけるもろもろの統計学的手法，オペレーションズ・リサーチ（OR），初期のゲーム理論などにすぎない。ジュヴネルが疑問視するのは，それらの予測テクノロジーがいずれも人間行動の予測にさいして過度に単純化された初期状態を所与のものとしなしている点である。その隆盛の背後には，人間的事象を含むすべての変化の現象を自然の過程とのアナロジーによって，すなわち「人間の意志によって選択された目標ではなく，その結果を自覚的にねらっていない諸行為の錯綜した収斂結果」[AC:144] とみなすプロセス思考の覇権がある。だが，

仮に自然科学とのアナロジーによって論じるならば，わたしが思うに，われわれはコトが想像したように人間の未来を知ることができるなどとは推論できない。われわれの諸科学が，そしてそれとともにわれわれの力が発展するにつれ，可能な未来の多様性はわれわれがこの力を利用するのに応じてますます豊かになっていくようにわたしには思われる [AC:142]。

未来の多様な可能性は，その創造者である現在のわれわれの未来にたいする責任の感覚——「結果にたいする責任の感覚が政治的決定形成に浸透し，それを特徴づけている」[PTP:201]——を強化する。政治と政治学にとっての“futuribles”の重要性は，なによりもこの責任によって説明されるのである。

4 予測の制度化とデモクラシー

未来研究が実践的かつ政策志向的な学問として確立するにつれ，予測の問題は現在までにさまざまに分化した社会諸科学がそこにむかって収斂していく求心点となり，現実の決定形成への適用にも関心があつまようになった⁽³⁶⁾。未来研究を政治学に取り入れる試みはすでに政策科学（policy sciences）に結実しつつあるが，その最重要トピックのひとつに，予測を政治的決定形成過程に有機的に組み込んだ体制構想，すなわち予測の制度化の問題がある。今日の

政策科学の代表的主唱者である Y・ドロアによれば、政治過程が複雑化した現代では、政党、労働組合、利益集団のような準政治的・社会的集団が独自に未来を予測するのはもちろん、政府内部に未来予測を専門におこなう正規組織を設立する必要がある。「未来にたずさわるそのような部局のネットワークは、付加的な部局間連接組織として機能することにより、また代替的未来にかんする競合的見解をさまざまな部局が同時におこなう行動のための共通のフレームワークとして提供することにより、政府内部の協働と統合を強化するのにもきわめて有効であろう⁽³⁷⁾」。

予測の制度化にいち早く関心を寄せてきたジュヴネルは、「予測フォーラム」(forum prévisionnel)なるものを提唱している。そのイメージはドロアという予測に専従する多様な組織の「ネットワーク」に一部重なるが、正規の政府機関として構想されない点が決定的に異なる。「予測フォーラム」の適切なイメージは、「無関心でもだまされやすくもない聴衆、一団の啓蒙されたアマチュア」を相手にした予測の「自由市場」(marché libre)ないし「証券取引所」(bourse)である [AC:191]。

その気があれば「客」はだれでも製品化された予測に眼をとめ、品定めすることができるようになる。のみならず、そしてこれが技芸の発達にとって必要不可欠ののだが、職人的予測家たちが相互に学びあって各自の未熟な製品に改善を加えることもできるようになる。そのような品評会を、いやそれどころか品評会以上の常設市場を設立しようというのが、フュチュリブルの主たる目的であった。このアナロジーをさらに追求するならば、そのような展示会は予測の「インダストリー化」、すなわちもろもろの精神を結集し体系的な手続きを有する生産の促進機会を提供するのである [ACe:151-52]⁽³⁸⁾。

未来予測が多数の予測アクターの参加を前提とすることは政策科学も承認するところであるが、ジュヴネルの「予測フォーラム」構想は、予測の複数性に加えて自律性と公開性を同時に重視する点に特徴がある。すなわち「予測フォーラム」が機能するには、まずそれが「政治フォーラム」における

決定形成過程から「ある程度独立して」[AC:191] 存在することが制度的条件であるとみなされる。「われわれの時代の尋常ならざる事態のひとつは、一般的関心事とあらばすべて国家によってなされるべきだという考えである。……予測市場においては独占が別して危険なものとなる」[AC:194]。したがって、「未来のリベラルな体制においては、さまざまな意図に発した予測の議論にある重要な地位が振り当てられ、権威主義的な命令の地位は低下するべきである」[AC:310-11]。他方、「予測フォーラム」が多様な未来の「常設市場」として政府の外におかれることは、かならずしもそれが公的な価値をもたないということの意味しない。なぜならここで重要なのは、「公的な（「政府による」という意味での）決定の利用に供される予測は、公的（「公衆の面前にさらされる」という意味で）でなければならない」[AC:345] という一事だからである。予測から決定にいたるまでが政府内部で不可視の過程になりやすい今日、「予測フォーラム」は決定選択肢の各帰結の予測を「政治フォーラム」に先立つ議論（pre-discussion）の俎上にのせることを可能にする⁽³⁹⁾。

とりわけ予測の自律性を強調するジュヴネルの議論の背後には、予測テクノロジーの発達を「デモクラシーの科学」（H・ラズウェル）の観点から肯定する楽観主義的風潮とは無縁な、むしろ未来予測を包囲する政治的環境についてのきわめてペシミスティックな診断があると考えられる。社会の脱伝統化にともなう不確実性の昂進は、予測の価値を高めただけでなく、社会における予測の意味そのものを著しく政治化することにもなった。慣習への信頼や信義の道徳的確実性を喪失したポスト伝統社会は、事象生起の確実性の保証を国家にもとめる傾向を強化する。社会が安定をより強く欲すれば欲するほど、予測の機能と責任はますます政府の独占に帰すようになり、『権力論』にいう「権力成長の自然史」過程は加速するのである。だがこの現象はつぎの事実によっていっそう黒々と塗り込められる。フランスの第五次経済計画が（そして「グループ 1985」でさえもが）予期できなかった不測のできごととは、五月革命だけをいうのではない。五月危機の收拾を模索するポンピドゥー政権は、広範な社会保障規定や全国一律の最低賃金制を内容とする社会契約（いわゆる「グ

ルネル協定 (Accords de Grenelle)』を政労使の三者間で締結するにいたったが⁽⁴⁰⁾、予測のシナリオになかったこの事態の結果として生じた賃金高騰と労働界の分裂こそが第五次計画破綻の直接の原因であった。つまり予測不能な偶然性はいまや政府によってもたらされるのである。

「政治における組織革命と政府による計画化の拡大は、人間の運命にたいする人間の制御力強化の希望によって導かれている⁽⁴¹⁾」と述べるS・ピアにしたがえば、集産主義における管理社会化・官僚化・集権化・公共支出増大は、それ自体が近代化の、つまり偶然事に対処する理性がはからずとも生み出す偶然を、理性のさらなる増大によって制御しようとする無限の合理化過程(ウェーバー＝パーソンズ)の必然的な結果にほかならない。ジュヴネルが問題視するのは、政府規模および国家機能の肥大化がかならずしもそれに相応する政治システムの自己制御＝予測能力の発展をともしななかったことである。予測不能な偶然性を縮減しようとする政府のパフォーマンスそのものが偶然性の源泉となるにつれ、政治的予測——公的権威によって「なに」が決定されるかの予見——はいっそう困難をきわめるようになるのである。予測のパラドクスともいべきこの事態が昂進する最大の要因は、ジュヴネルによれば、決定権威が少数者によってになわれる現代の傾向であった。「決定形成者の数はその行動の統計学的準則性を要請するには少なすぎる。決定形成者の特異な性格や個人的動機の大いなる重要性がみとめられねばならない」[AC:136]。国家規模の拡大に反比例して進行した決定権威の人格化は、政治の世界に固有の予測不可能性を、すなわち「公的決定にかんする不確実性と、権威が意のままにできる方法および手段の使用にかんする不確実性」[AC:305]を生み出す一方、「権威ある地位の保持者で自分の決定の帰結の説明を歓迎するという気質の者はまずいない」[AC:183]という古来の真理の説得力をますます高めてきた⁽⁴²⁾。そしておそらくその危険は、権力がひとりの人格の手に握られるとき絶頂に達する。

パーソナリティは政治においてはいつでも重要であり、またわれわれの世紀ほどパーソナリティが重要であったことはない。われらが世紀は個人を集合化すると同時に、集会的権力を個人化する傾向があったからである。そこからくるのが、わたしが思うに、社会経済に付随することがらについては予測可能性が向上するのに、こと政治のことがらにかんしては予測可能性が低下するという事態であった。一国民の頂点に座を占める人間の行動の自由を誇張するつもりなどない！この人物はつねに火山のうえに座っているのだが、その座りかたが大いに問題なのである[DP:225]。

現代の権力を特徴づけるこの「単独者の支配」(*puissance d'un seul*)あるいは「人格的権力」(*pouvoir personnel*)を、ジュヴネルはローマ帝国初代皇帝アウグストゥスの統治形態にならって *principat* と名づけている⁽⁴³⁾。現代の *principat* はデモクラシーの内部から生じるがゆえに、伝統的なデモクラシーの機構（たとえば決定形成者の頻繁な交代、職能代表の実質化、司法権の独立）はもはや有効な処方たりえない。決定権力を独占する政府のパフォーマンスそのものが人格化によって偶然に左右されやすい今日のデモクラシーにとっては、決定と予測の分業こそが自由を確保する最善の方策になる。「われわれが予測可能性を必要とするのは、われわれの自由の行使のためである」[AC:310]。

ジュヴネルの断片的な記述をまとめると、「予測フォーラム」はつぎのようなものになるだろう。「予測フォーラム」は「政治フォーラム」の外部に常設され、その決定に先立ってさまざまな決定選択枝の将来結果を比較考量する。それは多様な社会的主体の参加を前提とするが、現代の議会のようなそれらの力の比例的表現の場ではなく、予測の専門家たちで構成されるある種の公開「評議会」⁽⁴⁴⁾であり、いま決定すべき最適解を思慮する場である[AC:311]。このとき必要になるのは、もろもろの選択枝のあいだに優先順位をつける実際的な判断力であって、諸価値のあいだの永続的なヒエラルヒーを認識する形而上学的な能力ではない。それゆえ「予測フォーラム」の主宰者にもっともふさわしいのは、「ジェネラリスト」たる政治学者である。政治学者は「特定の問題に注目することを要求し、当該分野の有能な専門家の召集をもとめることができ

る。だがそれにもまして政治学者は、専門家たちがそもそもの問題に答えるべきかを指示できる。なぜなら政治学者はさまざまな問題相互の関係に通じてなければならないからである」[DP:217]。

5 「よりよき生」にむけて

われわれはテクノロジー化のプロセスがどこへ連れていくかと問うだけに甘んじてはいない。われわれは、人間という植物 (*pianta uomo*) が繁茂するプロセスを考案するのに最善の方策はなにかと問うこともできるし、またたしかにそれを問わなければならない。長期的予測が規範的であるのは当然であり、不可避でさえある[AC:293]。

未来が現在のわれわれの選択にかかっているのだとすれば、予測の主たる任務は、現状を危機的状態になるまで放置すればどうなるかの警告（第一次的予測）や、決定権威が実際にどのような決定を選択するかの予想（第三次的予測）ではなく、どのような選択がもっともよい帰結をもたらすかの思慮（第二次的予測）である。しかしそれには、「人間という植物」（アルフィエリ）にとって望ましい環境のヴィジョンが必要であろう。『予測のアート』後のジュヴネルは、まさしくこの「よりよき生」（*mieux vivre*）をもとめてさらに多様な知の領域を渉猟する。

1965年の『ディーダラス』誌ユートピア論特集号に寄せたエッセイ⁽⁴⁵⁾のなかでジュヴネルは、ユートピア文芸の現代的表現であるサイエンス・フィクションに「われわれが建設しようとしている生活のスタイルについての明確なイメージの欠如」[DP:241]という共通点があること、またそれがテクノロジーの発展によってもたらされた「新しい宿命論」（*nouveau fatalisme*）に起因することを指摘している。だがジュヴネルの真意は科学的ユートピア小説をなべて否定することにはなく、文芸の一ジャンルとしての「ユートピア作品に特有かつ本質的な説得様式」の効果を再認識させることにこそあった⁽⁴⁶⁾。ユートピア小説の典型的なあらすじを考えてみよう。未知の土地に漂着した主人公がま

ず住人のひとりに遭遇し、その珍しいいでたちやふるまいに驚く。ついでその居住地に招き入れられ、市民たちの奇妙だが好ましい生活ぶりを自分の眼でつぶさに観察する。主人公がその国の中枢部にいたって社会構造の全般的な説明を受けるのは、ずっとあとになってからである。だが読者が主人公とともに連れまわされるユートピア「観光旅行」は、本筋とは関係のない脱線やおまけのようなものではない。それは最終的に最善の制度構想を読者に受け入れやすくするユートピア文芸の戦略であり、それゆえ「実践的目的に向けたユートピア」の不可欠の部分だからである。

こうしてわれわれは、ありふれた人間の日常に眼をむける必要に思っていた。そのような人間をひとり取り上げ、起床時から就寝時までずっとつきまってみよう。この人間の快の印象と不快の印象の連続的継起をいわばプロット仕立てにしてみよう。そして「好い一日」(“bonne journée”)とはいかなるものであるべきかを想像してみよう。そのような「好い一日」を活写することこそが、現代のユートピアに踏み入るための第一歩なのだ。こうしてあなたは、この「好い一日」を実現しようという条件の探索を余儀なくされることになる [DP:244]。

まだ見ぬ人間の生をその全体的日常性において描くすぐれたユートピア文芸は、「よりよき生」の実現にむけて読者を実際に動かすことができる。かつて『すばらしい新世界』のエピグラフにベルジャエフの警句「ユートピアの究極の実現をいかにして避けるべきか」を掲げたハクスリーは、それからちょうど30年後に、一転してなんの銜もなく「いま・ここ」にあるユートピアを構想する『島』を書きあげて没した。ユートピア小説の伝統的パターンを忠実になぞり、大半が「パラ」と呼ばれるユートピアにおける市民生活の記述にあてられたこの作品によって、ペシスティックな警世家的予測者であったハクスリーは、長期的に望ましい未来の実現にコミットする予測者へと確実に変貌を遂げたというべきなのである。

そのような実践的予測に従事する専門家をジュヴネルは「フォアワーディスト」(Forwardist)と名づけている [OAF:25]⁽⁴⁷⁾。さしあたりかれらにもとめ

られるのは、決定主体になりかわって決定選択枝のそれぞれの将来結果を予測し、そこに潜む社会にとっての危険を察知するいわば早期警戒組織の役割である。それにはもちろん科学的な手続き——結果としての未来とそれを生ぜしめる現在の原因のあいだに、科学的法則・命題・仮説などの理論的前提にもとづく関係（通常それは経験的に検証可能な操作的かつ記述的モデルとして提示される）を演繹的に設定した推論——が欠かせないだろう。しかし、「原因からはじめる反省の場合には数多くのもっともらしい出発点があるものだが、目標にむかって進む反省の場合にはただひとつしかないように思われる。すなわち平凡な日常生活の質である」[OAF:28]。

「フォアワーディスト」は、あくまでディテールの積み重ねのなかから形成される未来の生活の全体像を重視し、生を断片化・抽象化する「分析的」なもののみかたを拒絶する。ジュヴネルが「分析的」と呼んで批判するのは、家計を無視した企業中心の経済パフォーマンスの把握（たとえば経済表）、購買量の増大のみを基準にして世帯あたりの住居面積の減少に着目しない社会調査、自然環境の変化に無頓着な開発計画など、要するに「平凡な日常生活の質」への配慮や展望をともなわない研究の手法のことである⁽⁴⁸⁾。公的権威による立法や政策の選択枝を、そのそれぞれが決定された場合に生じる結果の観点から比較する予測においても、考慮されるべきはつねに未来の「平凡な日常生活の質」が向上するかどうかでなければならない。その指標としてジュヴネルが提起したのが、人間存在の条件をなす自然環境・労働・他者との関係における「アメニティ」(aménité) という概念であった [A:149-51]。「アメニティ」の増加を基準としてはかられる「よりよき生」の探求は、効率一辺倒の「政治経済学」を、公正な社会的資源配分、人間の基礎的ニーズの充足、そして開発と環境保全との両立をめざす「政治的エコロジー」(l'écologie politique) へと変貌させるだろう⁽⁴⁹⁾。『アルカディア』(Arcadie, 1968) にまとめられたこのメッセージは、「アメニティ権」を提唱する E・J・ミシャンや「スモール・イズ・ビューティフル」を説く E・F・シューマッハーらに受け継がれ、成長至上主義を批判する厚生経済学や環境経済学の興隆を促すことになるのである⁽⁵⁰⁾。

かつて『再分配の倫理』（*The Ethics of Redistribution*, 1952）において「実際の結果としての再分配は……富者から貧者への自由所得の再分配であるどころか、個人から国家への権力の再分配である⁽⁵¹⁾」と断じた「リバータリアン」の面影は、もはや微塵もない。そこに変節や自己矛盾をみるのは簡単だが、政治哲学者自身は意に介しているようすはない。かれはただハクスリーにならって、ベシミスティックな警世家から望ましい未来の実現にコミットする予測者へと歩みをすすめただけなのである。

〔テキストにかんする注記〕

ジュヴネルの主要著作のうち、引用・引照頻度の高いものについては以下の略号を用い、かっこ〔 〕内に頁数を付して出所を示す。

A. *Arcadie, essais sur le mieux vivre* (Paris: SEDEIS, 1968).

AC. *L'Art de la conjecture* (Monaco: Éditions du Rocher, 1964).

ACe. *The Art of Conjecture*, translated from French by Nikita Lary (New York: Basic Books, 1967).

DP. *Du principat et autres réflexions politiques* (Paris: Hatchette, 1972).

OAF. "On Attending to the Future," *Environment and Change: The Next Fifty Years*, ed. William R. Ewald (Bloomington and London: Indiana University Press, 1968).

PF. "The Planning of the Future," *The Great Ideas Today*, Vol. 19 (1974).

PTP. *The Pure Theory of Politics* (Indianapolis: Liberty Press, 2000)〔第2章のみ、中金聡訳「知恵と活動——偽アルキピアデス」, 政治哲学研究会編『政治哲学』第13号(2012年)〕。

注

- (1) オーウェルに宛てた 1949 年 10 月 21 日付の『1984 年』献本礼状で、ハクスリーは二人の逆ユートピア小説がともに「究極の革命」—「政治と経済を超越したところに存し、個人の心理と生理の全体的な転換を目的とした革命」—をテーマとしていることをみとめたうえで、「人びとを鞭打って隷従状態に蹴り込むのと同じくらい、自分の奴隷の身分を愛するようしむけることによって権力欲は完全に満足させられうる」がゆえに、将来の世界統治者は『すばらしい新世界』に示された統治手段のほうがより効率的と考えるだろうという。Cf. *The Letters of Aldous Huxley*, ed. Grover Smith (London: Chatto & Windus, 1969), pp. 604-5.
- (2) Aldous Huxley, *Brave New World Revisited* (London: Flamingo Modern Classic, 1994), p. 2.
- (3) Thucydides, *The Peloponnesian War*, translated by Thomas Hobbes, ed. David Grene (Ann Arbor: The University of Michigan Press, 1959), p. 48 [I. 83. 3] and p. 391 [VI. 23].
- (4) モーリス・メルロ＝ポンティ、森本和夫訳『ヒューマニズムとテロル』（現代思潮社、1976 年）、19 頁。
- (5) Cf. Ossip K. Flechtheim, “Futurology,” *Historisches Wörterbuch der Philosophie* (Basel: Schwabe & Co. Verlag, 1972), S.1151f; *The Futurists*, ed. Alvin Toffler (New York: Random House, 1972).
- (6) 「グループ 1985」の名称は、第五次計画の実施年度から一世代を経た 20 年後を見据え、実現の確率の高い予測をおこなうという目標に由来する。Cf. *Réflexions pour 1985* (Paris: La documentation Française, 1964), pp. 9-10. ピエール・マッセ、岡山隆・寿里茂訳『計画の思想——偶然性との闘い』（ダイヤモンド社、1972 年）、35–37 頁参照。ただしそれがオーウェルの『1984 年』を揶揄したものであり、そのペシミズムに対抗する意図をもっていたことはほぼ確実であると思われる。
- (7) Cf. Aurélien Colson et Yves Cusset, “Retour sur un exercice de prospective: réflexions pour 1985,” *Horizons stratégiques*, No. 7 (2008).
- (8) 未来研究の歴史については Edward Cornish, *The Study of the Future* (Washington, DC: World Future Society, 1977) ; Wendell Bell, *Foundations of Futures Studies: Human Science for a New Era, Vol. 1, History, Purposes and Knowledge* (New Brunswick and London: Transaction, 1996), pp. 1-72 を参照。

- (9) 未来研究にかんする国際センター「フュチュリブル」は、フォード財団の援助で1961年にパリで創設され、援助終了後の67年にシンク・タンク「フュチュリブル国際協会」(Association Internationale de FUTURIBLES)として再出発した。71年にはベルジュの「プロスペクティヴ研究センター」と合併し、現在はジュヴネルの息子ユージュを総帥として機関誌『フュチュリブル』(*FUTURIBLES: Analyse, Prévision, Prospective*)を発行している。その周囲に集まった人びとには、M・ペロフ、M・M・ポスタン、J・エリュール、R・ホガート、R・シュヌール、M・マスネ、T・H・マーシャル、E・R・リーチ、A・ゲーレン、D・ベルなど、英米独仏の主導的な社会学者たちがいる。「フュチュリブル」国際研究会はジュネーヴ(1962年)、パリ(63年)、ニュー・ヘイヴン(64年)と回を重ね、65年に再度パリで開催され120名の参加者を集めた第4回大会は「未来志向の研究者の会合としてはその当時まででおそらくは最大」であった。Cf. Cornish, *op. cit.*, p. 139. 未来研究の発展にジュヴネルおよび「フュチュリブル」が果たした役割については Jacques Freymond, “Itinerary,” *Government and Opposition*, Vol. 15 No. 3/4 (1980); Robert Colquhoun, “The Art of Social Conjecture: Remembering Bertrand de Jouvenel,” *History of the Human Sciences*, Vol. 9 No. 1 (1996); Eleonora Barbieri Masini, “The Long Term Impact of Bertrand de Jouvenel,” *Futures*, Vol. 29 No. 9 (1997); Eleonora Barbieri Masini, “Futures Studies from the Experience of a Sociologist Who Tries to be a Futurist,” *American Behavioral Scientist*, Vol. 42 No. 3 (1998)などを参照。なおジュヴネルは『予測のアート』の成功により1966年にパリ大学(ソルボンヌ)法経済学部に客員教授として迎えられた。Cf. Olivier Dard, *Bertrand de Jouvenel* (Paris: Perrin, 2008), p. 331.
- (10) *Futuribles: Studies in Conjecture*, Vol. 1, ed. Bertrand de Jouvenel (Geneva: Droz, 1963), p. xi.
- (11) Cf. Stephen Toulmin, *Cosmopolis: The Hidden Agenda of Modernity* (Chicago: The University of Chicago Press, 1990), p. 213.
- (12) F・L・ボラック、林雄二郎監訳『予測学——未来を展望し創造する新しい科学の提唱』(ダイヤモンド社、1974年)、228–29頁参照。フランソワ＝ベルナル・ユイグ、丸岡高弘訳『未来予測の幻想——ジュール・ベルヌからビル・ゲイツまで』(産業図書、1997年)、119–20頁参照。
- (13) これを逆手にとって方法論的に精緻化し、もとめられている未来をエキスパートや有識者への反復アンケートの収斂結果にみるのがデルファイ法であり、日

本のいわゆる日銀短観も基本的にはこれに類した手法を採用している。またシナリオ・プランニングは、過去の優勢なトレンドの延長になりがちな長期予測にあたり、新しい傾向の出現や変化を予測するためにより想像力的なアプローチ（ユートピア小説やサイエンス・フィクションを含む）を盛り込んだもので、日本の経済産業省が2004年に発表した「2030年のエネルギー需給展望」にも採用された。いずれにしてもこれらの技法による予測の精度を高めるには、具体的適用にあたって他のより「科学的」な技法と組み合わせ、「主観的」要素を最小化することが必要視される。

- (14) 日本でも多くの読者を獲得したF・K・ディック『アンドロイドは電気羊の夢を見るか?』（浅倉久志訳、ハヤカワ文庫、1977年）には、予測テクノロジーの開発およびアメリカ国防政策との密接な関係で知られたシンク・タンク「ランド・コーポレーション」へのシニカルな言及がある（23頁参照）。
- (15) Cf. Michel Godet, *Crise de la prévision: essor de la prospective. Exemples et méthodes* (Paris: PUF, 1977).
- (16) 1960年代に高揚した未来予測への関心はまさしくその点を明らかにしているとジュヴネルはいう。「ここには知識人共同体の態度と役割に深甚なる変化が生じている。すなわち、伝統的に知識の発展および伝播に邁進してきたこの共同体は、いまや予測（予測はたしかに知識のうえに築かれるが）を構築し伝導している。それはまた公衆の態度の深甚なる変化をあらわしてもいて、公衆の関心を時間の次元にまで拡張し、その現在にかんする判断と要求とを未来への関心で染めあげている」[PF:127]。ジュヴネルは未来予測の可能性を理論的に追求するだけでなく、公私にわたり具体的な社会・経済・政治予測に携わってきた。1954年創設のS. E. D. E. I. S. (Société d'Études et de Documentation Économiques, Industrielles et Sociales) 所長としての活動を皮切りに、かれが招かれた公職には「グループ1985」メンバー、フランス政府諮問機関の国家会計委員会や計画委員会、あるいはヨーロッパ経済共同体の中期経済戦略構想にあたる専門家グループなどがあり、アカデミックなキャリアとしては国際社会学協会 (ISA) 未来リサーチ委員長、アメリカ未来学会 (IFF) 名誉議長、イギリス社会科学リサーチ学会顧問などがある。さらにジュヴネルは、70年にマルタで発足した海洋環境の保護と海洋資源の可能性を模索する国際プロジェクト「海の平和」(*Pacem in Maribus*) にもコミットし、72年の年次大会で研究プロジェクトII「海洋の経済的潜在力」の企画責任者をつとめている。このときの基調講演「海洋問題の経済学的観点」(“Vue Économique des Problèmes Marins”)は

Pacem in Maribus: III Study Project, Pacem in Maribus Preparatory Conference (Split, Croatia, 1972) に収められている。

- (17) 中金聡「ベルトラン・ド・ジュヴェネルの政治哲学」, 政治思想学会編『政治思想研究』第6号（2006年）, 参照。
- (18) *The English Works of Thomas Hobbes*, Vol. VIII (London: John Bohn, 1843), p. vii. そのかぎりでは、歴史家が「たまたま筆をすべらせる、秘められた目的や内奥のもくろみへの推測 (conjectures) ……も、その推測が十分な根拠をもってなされる歴史においてはまったく価値がないわけではない」(*ibid.*, p. viii)。なぜなら、「人びとの眼前に、よい意図と悪い意図との成り行きと結末を一見して明白なかたちで示してしまうと、物語それ自体が知らず知らずのうちに読者を教え導き、しかも戒律によってなされうるよりもずっと効果的に教え導く」(*ibid.*, p. xxii) からである。
- (19) Thomas Hobbes, *Leviathan, or the Matter, Forme and Power of a Commonwealth Ecclesiastical and Civil*, ed. with an Introduction by Michael Oakeshott (Oxford: Basil Blackwell, 1946), p. 16. 水田洋訳『リヴァイアサン (1)』(岩波文庫, 1992年), 63頁。
- (20) *Ibid.*, p. 247. 水田洋訳『リヴァイアサン (3)』(岩波文庫, 1992年), 37頁。
- (21) Cf. *ibid.*, p. 53. 邦訳 (1), 146頁参照。
- (22) *Ibid.*, p. 30. 邦訳 (1), 94頁。
- (23) レオ・シュトラウスのホッブズ研究はこの経緯を詳細に検討したものとして名高い。「政治論の根拠づけとその目標設定の本質的内容にかんしては、トゥキディデスの翻訳への序論からもっとも後期の著作にいたるまで何ら変化はなかった、とわれわれは結論する。変化したものは、なかならず根拠づけの方法である。すなわち、ホッブズはもともとは主として歴史（からの帰納）に依拠するが、のちには主として情念の直接的な研究に依拠するようになる。ただ根拠づけの方法だけが、したがってまた叙述の方法だけが、ユークリッドの原理の「発見」によって決定的に影響されえたのである」。Leo Strauss, *The Political Philosophy of Hobbes: Its Basis and Its Genesis* (Chicago: The University of Chicago Press, 1952), p. 112. 添谷育志・谷喬夫・飯島昇蔵訳『ホッブズの政治学』(みすず書房, 1990年), 142頁。
- (24) 「わたしはより当世風の予知 (prescience) や予言 (prediction) あるいは未来志向精神 (future-mindedness) さえよりも、古臭く控えめな慎慮 (prudence) ということばを好んで用いる。なぜなら慎慮とは、人間的なことがらの有益なる

遂行を目的とする全精神活動を統合したものだからである」[PF:149]。

- (25) Bertrand de Jouvenel, "Introduction," *Thucydides, op.cit.*, pp.xiii-xiv.
- (26) このタイトルの直接の出典はスイスの数学者ジャック・ベルヌイの著書『予測術』(*Ars Conjectandi*, 1713)である。ちなみにジュヴネルは“conjecture”のほか
に“prévision”を便宜上ほぼ同義語として用いるむね弁明しているが[AC:32],
フランス語の“conjecture”が含意する認識論的な内容を英語でもっとも正確に
表現するのは“surmising”だと考えているようである。
- (27) アリストテレスは詩と歴史とを区別し,「詩人の仕事は実際におこったことを
描くのではなく, おこりうること, 蓋然のと必然的とを問わず可能なことを描
くことである」と述べている(『詩学』[1451a39-40])。ジュヴネルの未来予測
とアリストテレス詩学との類似については cf. Heli Paalumaki, "Imagine a Good
Day: Bertrand de Jouvenel's Idea of Possible Futures in the Context of Fictitious and
Historical Narratives," *Ennen & Nyt*, Vol. 1 (2001)。
- (28) Hobbes, *Leviathan*, p. 46. 邦訳(1), 131頁。
- (29) たとえば制限選挙制度の下での当選をあて込んだ候補者の選挙運動は普通選挙
権の導入によって不首尾におわり, 植民地総督をめざしてキャリアを積んで
きた若者は植民地の消滅によって挫折する。だが社会がいかに変化しようと
も人間が維持することのできる企図がただひとつある。すなわち「自己完成
(perfectionnement) にむかって努力する企図」である。「この真理は古いもの
だが, だからといって忘れてよい理由にはならない」[AC:52]。
- (30) ジュヴネルによれば, これは原子(あるいは個人)レヴェルで主張されたハイ
ゼンベルクの不確定性原理を社会レヴェルに適用したものである。
- (31) 『予測のアート』の議論には, 科学者の営為の「^{アート}技芸」的性格を強調する
M・ポランニーの著作からの影響が随所でみとめられる。たとえば「予想」
(anticipation) についてポランニーはつぎのようにいう。「一瞬一瞬に, 森羅万
象をとおして, 事物の状態を明白に更新していく不断の変化のために, われわ
れの予想はつねに何らかの程度において新奇で空前の事物に出会うことにな
る。こうしてわれわれが依拠するのは, 予想と, さらにこうした新奇かつ空
前の状況にたえず再適応していく能力との両者なのだ。これは技能の行使, 知
覚の形成, さらに欲望の満足についてすら妥当することであって, 既存の枠
組みが予想された事象を取り扱うたびに, この枠組みはこれに応じてある程
度は自らを改変するのである」。Michael Polanyi, *Personal Knowledge: Towards a
Post-Critical Philosophy* (The University of Chicago Press, 1958), p. 103. 長尾史郎

訳『個人的知識——脱批判哲学をめざして』（ハーベスト社、1985年）、95頁。より直接に「未来の解釈学」と関連するのは、「未知のものを見よ」（G・ポーリャ）という格言にポランニーがあたえた説明である。その意味は「われわれは既知のデータを見るべきであるが、ただそれ自体としてでなく、むしろ未知のものの手がかりとして、その指示および部分として見るべきだということである。……そうした予示により、その未知のものが現実そこにあり、本質的にそれについて知られていることにより決定され、そして問題によってそれにもとめられている要請をすべて満足できるのだということが確信されてくるのだ」。Ibid., pp. 127-28. 邦訳、118頁。なお『予測のアート』のなかでポランニーに言及した箇所[AC:316]では、支配的な観念体系の形成・伝搬・変化の意味が科学者共同体と通常の人間社会とで本質的に異なることが説明されている。この点については、ポランニーの「科学の共和国」と政治社会の比較を試みたジュヴネルの論文“The Republic of Science,” *The Logic of Personal Knowledge: Essays Presented to Michael Polanyi on his Seventieth Birthday, 11th March 1961*, eds. P. Ignotus et al. (London: Routledge & Kegan Paul, 1961) を参照。ジュヴネルとポランニーはともにF・A・ハイエク、L・E・ミーゼス、M・アレラを擁した「モン・ペルラン協会」の創立メンバーに名を連ねている。主として政治経済論の領域でのジュヴネルとかれらの交流もしばしば指摘される。

- (32) 政治的予見可能性を維持する国家——「正則システム」(système réglé)——の歴史的モデルは、手続きの神聖さへの信念および権力行使のミニマリズムによって際立つ「英国システム」と、主権の正統性を予見可能性の守護者としての自覚にもとめる「フランス君主制」である。「アンシャン・レジームの欠陥についてひとは誤解してきた。その主たる難点は、恣意性ではなく必要な変化を促す力に欠けることであった」[AC:309]。
- (33) たとえ政府をもってしても制御できない「絶対的に支配的」な未来の一例として、ジュヴネルは人口増加をあげている[AC:144]。なおハクスリーにとっても全体主義に直結する人口過剰はもっとも憂慮されるべき問題であった。Cf. Huxley, *Brave New World Revisited*, chap.1 “Overpopulation.”
- (34) 以下の予測類型論は、英語版『予測のアート』で大幅に増補された箇所にもとづく。
- (35) Bertrand de Jouvenel, “Notes on Social Forecasting,” *Forecasting and the Social Sciences*, ed. Michael Young (London: Heinemann, 1968), p. 120.
- (36) Cf. Franklin Tugwell, *Search for Alternatives: Public Policy and the Study of the Future*

- (Cambridge, MA: Winthrop, 1973) ; Wendell Bell, *Foundations of Futures Studies: Human Science for a New Era, Vol. 2: Values, Objectivity and the Good Society* (New Brunswick and London: Transaction, 1997).
- (37) Yehezkel Dror, *Ventures in Policy Sciences: Concepts and Applications* (New York: American Elsevier, 1971), p. 65. 政策科学にとっての未来研究のインプリケーションおよびドローアによるその評価については Yehezkel Dror, “Some Fundamental Philosophical, Psychological and Intellectual Assumptions of Futures Studies,” *The Future as an Academic Discipline*, Ciba Foundation Symposium 36 (Amsterdam: Elsevier, 1975) を参照。
- (38) この一節を含め、フランス語オリジナルにはない英語版で加筆された箇所は、ジュヴネル自身の意向に添うものと考えてよい。『予測のアート』がアメリカの新保守主義者 I・クリストルのベーシック・ブックス社から英訳刊行されるさい、ジュヴネルはそれが「ある種のアメ리카版」になることをおそれて、翻訳作業をつきっきりで指導したという。Cf. Dard, *op. cit.*, p.331.
- (39) Cf. Bertrand de Jouvenel, “The Surmising Forum,” *The Spectator*, Jun 12 (1964), p. 789; “Pre-Discussion: the Condition of Democracy,” *The Spectator*, July 3 (1964), pp. 7-8.
- (40) Cf. Michael Seidman, “Workers in a Repressive Society of Seductions: Parisian Metallurgists in May-June 1968,” *French Historical Studies*, Vol. 18 No. 1 (1993), p. 264.
- (41) Samuel H. Beer, *Modern British Politics: Parties and Pressure Groups in the Collectivist Age*, 3rd Edition (London: Faber and Faber, 1982), p. 409.
- (42) 政治哲学者ジュヴネルの基本的な確信事項は「政治的活動は知恵のおしえに耳を貸さないものだ」[PTP:21 / 31 頁] という命題に要約される。
- (43) 元来 *principat* は、古代ローマにおいて執政官、属州総督、護民官を兼務する「第一人者」(*princeps*) を意味した。タキトゥスによると、アウグストゥスは共和政時代の護民官職に在任のまま執政官を兼任し、ほどなく「元老院と政務官と法律の機能を一手に収攬する」にいたった。アウグストゥス逝去ののち、後継の推挙を固辞して寡頭合議制を説くティベリウスにむかって、ガルスは「公共体は一体であるがゆえにひとりの精神によって支配されるべきである」と主張した。Cf. Tacitus, *Annals* [1. 2, 12]. 国原吉之助訳『年代記(上)』(岩波文庫, 1981 年), 28 頁。なおジュヴネルは *principat* という用語を一九世紀フランスの経済学者 A・クールノーから借用したと述べている [PF:142]。

- (44) 『純粹政治理論』所収の「チーム対評議会」（“The Team against the Committee”）において、すでに「行為チーム」と「予測評議会」の分業が提起されている [PTP:228-41]。
- (45) Bertrand de Jouvenel, “Utopia for Practical Purposes,” *Utopias and Utopian Thought*, ed. Frank E. Manuel (Boston: Beacon Press, 1965; reprinted as “L’utopie dans des buts pratiques” in DP). ハクスリーの『島』 (*Island*, 1962) にトマス・モア以来のユートピア文芸の伝統復活をみるという視点から、L・マンフォード、N・フライ、J・シュクラール、M・エリアーデ、P・ティリッヒなど各分野を代表する思想家たちがそれぞれに興味ぶかい論考を寄せている。
- (46) ジュヴネルは父アンリと親交のあった H・G・ウェルズを「20 世紀のもっとも偉大な思想家」と呼んでいる。「なぜか。かれは生涯をつうじて人類の未来の進歩に取り憑かれていた。かれのサイエンス・フィクション作品のどれか一篇をとりあげたら、たんなる空想の産物としかみえないかもしれない。でも数篇読めば「可能な未来」(futures possibles) についての思考集成の全体を見いだすだろう」。Bertrand de Jouvenel, *Un Voyageur dans le siècle, 1903-1945* (Paris: Laffont, 1979), p. 97; cf. PF: 159-61.
- (47) これはアメリカ・プランナーズ協会が 1967 年 10 月 1 日から 6 日にかけてワシントンで開催した諮問報告大会での講演である。
- (48) Cf. Bertrand de Jouvenel, “Man and his Needs,” Jaap Boersma *et al.*, *Futures for Work: A Book of Original Readings* (The Hague: Martinus Nijhoff, 1979).
- (49) Cf. Bertrand de Jouvenel, “De l’économie politique à l’écologie politique,” *Bulletin SEDEIS Etude*, 671 (1957); reprinted in *La civilisation de puissance* (Paris: Fayard, 1976); “Efficiency and Amenity,” Earl Grey Memorial Lecture, King’s College, Newcastle-upon-Tyne (1960); reprinted as “Efficacité et savoir-vivre,” in A. ジュヴネルのエコロジー関連文献では、“The Stewardship of the Earth,” *The Fitness of Man’s Environment* (New York: Harper & Row, 1968) が「地球へのいたわり」(都市環境研究会訳『人間環境への適合』鹿島出版会, 1981 年所収) として訳出されている。
- (50) 都留重人監訳『経済成長の代価』(岩波書店, 1971 年)。小島慶三・酒井懋訳『スモール・イズ・ビューティフル』(講談社学術文庫, 1986 年)。なおエコロジー思想へのジュヴネルの貢献については以下を参照。Cf. Kerry H. Whiteside, *Divided Natures: French Contributions to Political Ecology* (Cambridge, MA: The MIT Press, 2002), pp. 23-24; Dennis Hale, “Welfare and Amenity in the Work of Bertrand

de Jouvenel,” *Political Science Reviewer*, Vol. 32 (2003); Olivier Dard, “Bertrand de Jouvenel et l’écologie,” *Écologie & Politique*, No. 44 (2012).

- (51) Bertrand de Jouvenel, *The Ethics of Redistribution* (Indianapolis: Liberty Press, 1990), p. 72. ただしジュヴネルは、後年つぎのようなコメントを残している。『『再分配の倫理』にかんしていえば、わたしはその再版をくりかえし拒絶してきました。過ぎ去った多くの年月をわたしはこの主題についてやしてきましたし、それには——いまやこう述べねばなりません——当時の自分が考えていたことだけでなく、その後あらたに獲得した知見も含まれているのです』。 *Ibid.*, p. xviii, cited by John Gray.